

『抗日パルチザン参加者たちの回想記』読書会 vol. 6

テキスト 梶村秀樹『排外主義克服のための朝鮮史』（平凡社ライブラリー、2014年12月）

戦後日本の朝鮮史研究のパイオニアであった梶村秀樹が、日本人が知るべき朝鮮近現代史を平明に情熱的に説いた3回の連続講演の記録。今回は、とくに「Ⅲ 八・一五以後の朝鮮人民」のうち、「一 戦後世界分割と朝鮮人民の苦闘」を重点的に読みます。

日時 **9月15日** 場所 **赤羽北区民センター（赤羽北ふれあい館）**
第1和室（椅子・座布団あり。アクトピア北赤羽六号館3階）
JR埼京線北赤羽駅赤羽口から徒歩1分、北区赤羽2-25-8

参加費 **ひとり500円**（要予約）

主催（予約） 前田年昭 メール tmaeda1966516@gmail.com
電話 080-5075-6869

- 参加希望の方は事前にお申し込みください（電話・メール）。
- 当日は報告者の問題提起と、感想や意見の交流、討議を行います。
- あらかじめ対象テキストを読んできてください。

13:30~14:30 **報告** キム・ヨンイル（福祉労働者） テキストⅢ 一 1~4
14:30~15:30 **報告** 須田光照（労働運動家） テキストⅢ 一 5~8
15:45~16:30 **討議**



第1回読書会（5月20日）で、「回想記」の歴史的背景、1930~40年代の朝鮮人民の抗日革命闘争史を学んだ私たちは、第2回（8月13日、報告：田代ゆき、キム・ヨンイル、須田光照）、第3回（12月2日、報告：キム・ヨンイル、前田年昭）、第4回（4月6日、報告：土田宏樹）と、参加者それぞれが選んだ回想記について報告し、全員での意見交換、討議を続けてきました。

第6回は、第5回に続いて梶村秀樹（1935~89）の『排外主義克服のための朝鮮史』を学びます。第5回（Ⅱ-三、四）に続いて第6回はⅢを学ぶことにします。朝

鮮史の研究と同時に梶村は、朝鮮人差別撤廃の運動を推し進め、日本の自民族中心の排外的あり方を批判し続けました。本書は、日本の労働者のなかにある民族排外主義を克服し、朝鮮人民との組織的な連帯をめざす思想的な手がかりです。

抗日パルチザン闘争と在日朝鮮人運動、そのなかで連帯をめざして試行錯誤した少数の先人の闘いを知り、学ぶことは、私たち自身の生きる糧です。国際主義の伝統はどこにあったのか。労働者に国境はありません。ともに読み、考え、話し合ひましょう。

『翻訳と連帯 ある寄せ場労働者の「抗日パルチザン参加者たちの回想記」翻訳の軌跡』

（編訳・鈴木武、発行・同志社コリア研究センター、2023年3月17日、非売品、A5判328ページ）

※本書は『回想記』全264話から精選した28話で、電子版が発行元の同志社コリア研究センターのウェブサイト <https://do-cks.net/works/publication/korea05/> で読めます。QRコードは⇒
264話全訳データは <https://fire.st/h6yq1ut> にあります。



第五回読書会での報告を終えて

差別意識と排外主義は、どこから来るのか——
根拠を経済にのみ求めても説明できない

前田年昭

梶村はⅡの三で「日本の労働者階級が朝鮮人民との連帯を組織的に追求したことはない」と断じ、同時に「その具体的なありようと限界」の「綿密に検討」が必要として、「日本の側で連帯の行動をとるべく、意識的に追求した人が果たしてどの位いるのだろうか、またどこまでやりきれたのか？ もし一人でもやりぬいた人がいるとすればその独立した行動がどのようにして可能であったか」と問題を設定している。上甲米太郎のような先進的事例を挙げながら、「総体として帝国主義イデオロギーの壁がいかにか厚いか」と強調、1930年代以降、朝鮮に住むようになった日本人労働者は闘うどころかむしろ敵対、「なぜか」というと、労働者の中に非常にはつきりと民族差別があつて日本人労働者はそこに安住……同じ労働者といながら、賃金水準を形式的にだけ比べても、一対二以上の開きがあり……特権に安住していた日本人労働者は当然のように体制側に立った。少なくとも組織的に朝鮮人の側に立つとする試みはまったくなかった」と説明している。

戦前や1970年代、日本の経済侵略下であればともかく、現在は「20年前は半分だった韓国の賃金、日本と逆転」（中央日報24・3・18）といわれ、差別意識と排外主義の根拠を経済のみに求めても説明がつかない。ナチズムは、下層労働者の資本家階級に対する憎悪を、小金持ち・ユダヤ民族に向け、ドイツ人民の現状打破エネルギーを右に集約した。いま、日本の権力は、「下級国民」の怒りや悔しさを妬みと憐みにすり変えて、排外主義をおおっている。

